

第八詩集 死滅する魚群

残酷な桜

桜はいやだ

昔からそう思っていた

桜は残酷な花だと

桜は虚無の花だと

大震災のときも

春は来る桜は咲く

これ見よがしに

満開に咲き誇る

多くの死者の魂のように

真っ白な花盛りだ

酌め酌め酒を

飲め飲め酒を

桜は愛でるな

早く散れ散れ

桜は消えろ

死の見える谷間

しあわせの後に来るもの

それは悪夢であり死期である

生物の節理は崩れず

高台を跳ねて走るとき

谷間から合唱が聞こえる

死者の合唱だ

引き込まれないように移動しよう

とするが油断をすると足を掴まれる

死者の手が伸びて

私を引きずり込もうとする

早く走らないと次に行けない

もうちよつと行かせて下さい

まだ春を見たいから

この世にしかない春を

震災の後に

沢山の死者から何かが生えて花が咲く

そうして花盛りの季節が来る

何と淋しい春なんだ

地面はまだまだ揺れて

僕らは夢を見ようとしても

楽しい夢がない

生まれる前にもこういう時があつたらしい

いい夢はずっと先だけでも

我慢して季節を巡り巡らせ

いつかまた夢の見られる時代が来るだろう

人間は続く必ず繋がる

子供の子供の子供の向こうには

また楽しい夢が見られる時がくる

どんなに永くかかっても

本当の花盛りの春が来るだろうか

戦争でもないのにこんな日が来るなんて

夢にも思わなかった

魚群の挫折

大洋を回遊する魚群に

何という妨害電波だ

目には見えないが

脳は捉える

太陽に歯向かい

摂理を裏切る奴を

神は許さない

人はいつ暴れ者の武器を

決して手の中に収まらない機械を

発明してしまったのか

悪い夢を見続けて

滅びの時を待つしかないのか
光も風も波もない静かな季節なのに

真っ黒な夏

最近真夏は空気が淀み

ドブネズミの棲家のように

行き苦しく真黒だ

風の入口が知りたくて

小さい炎を作ると

風洞はどこかに繋がる

腕時計は逆に回り

光は万華鏡のように回転し

眩い時代に投げ出される

これは多分夢だ

夢を見ていた時代だ

体も頭も全く若い

都市も自然も全く若い

人は老いると皆振り返る

あれは夏だった

炎の燃え盛る夏だった

それがいつから

真っ黒になってしまったのか

今一度炎を翳して

めくるめく夏に

投げ出されよう

秋が橋の向こうで

秋が橋の向こうで

私を待っている

けれど私はまだ

橋を渡れない

枯れた向日葵が

夏の終わったことを

私に告げる
早く橋を渡って
秋に会いにゆかなくちや
けれど私はまだ
橋を渡れない
秋が橋の向こうで
私を待っている

秋たけなわ

秋にはいつもどこかで
祭り三昧だ
今やらないと秋が逝く
焦らないと木々が枯れる
今だけ謳え踊れ騒げ走れ
酒に溺れよ祭りだワッショイ
祭りは刹那の夢見
誰もが死期の前が一番賑やかだ
全ては振幅
さざ波より大波がよい
花盛りの紅葉もやがて枯れる
万物の必定
いつも秋は竹縄

詩は世界を巡る

いくらなんでも頭が戦争
北半球と南半球が混ざり合って
星座がごちゃごちゃ
昼と夜の回転椅子
流星は雨あられ
風と波の入れ替え
どちらが太陽どちらが月か
夢も現実も分からない
混乱する空間
振幅の輪廻

死期の前のビックリハウス
さんずの川のコークスクリュウ
折角秩序作ってもあつという間の
卓袱台返し
世代は切れる
また一からやり直し
それでいいのかも知れない
それでも少しは進歩するだろう
連綿と繋がることはない
でも記録だけは残しておこう

死後の惑星

皆いなくなってしまった
独り寒い
何で私だけこっち河岸に
反空間という死後
形のないからだ
空洞の意識
時間のない花畑
流れのない川
色のないそら
これが無という時空
一瞬の永遠
単なる点
どうにもならない惑星
一から始める宇宙
どこかで神が嘲笑う